



監督 & 脚本=クァク・ジェヨン
 /原作=キム・ホシク/出演=
 チョン・ジヒョン/チャ・テヒ
 ヨン (アミューズピクチャーズ
 配給/2001年韓国映画/122分)

韓国で、そして日本で突如大ブームをおこした『猟奇的な彼女』。この映画は、「猟奇」という言葉をイメチェンさせただけでなく、若い男女の「恋愛事情」にも大変革をもたらした。「前半戦」から「後半戦」への攻防は面白く、また楽しいが、「延長戦」では、ついホロリ。実にいい映画です。

🎬 2年半遅れでやっと！

日韓がW杯で燃えたのは2002年の夏。『猟奇的な彼女』が大ヒットしたのは、さらにその1年前の2001年の夏だった。日本で公開されたのは2003年1月だが、日本でも大ヒット。「猟奇的な彼女」を演じたのはチョン・ジヒョン。この映画の大ヒットで一躍トップスターとなり、第39回大鐘賞主演女優賞と人気賞を同時に受賞した。1981年生まれだから、この『猟奇的な彼女』に出演したのは20歳の時ということになるが、長身でストレートな長い髪がよく似合う、目の「きつい」韓国美人。なお、この映画の中、「猟奇的な彼女」には名前がない。彼女は映画のタイトルどおり、「猟奇的な彼女」なのだ。

そのお相手をするキョヌ（チャ・テヒョン）は、女の子を欲しがっていた両親からまるで女の子のように大事に育てられた、気のやさしい大学生。運命的な「猟奇的な彼女」との出会いを出発点として、「前半戦」と「後半戦」での数々の攻防を経て、原作にはない、この映画オリジナルでつくられた「延長戦」へ。そして、その流れの中、「笑い」から次第に「感動」へ。この映画が圧倒的人気を

博した理由がよくわかろうというものだ。

「猟奇」ブームの発端は？

「猟奇」（韓国語ではヨプキ）という言葉は、決して明るいイメージの言葉ではなく、奇怪、異様、無気味などという、絶対的なマイナスイメージの言葉。そしてまた、めったに使う単語ではない。日本でも、この言葉が使われるのは、ちょっと好奇の目を持って呼ばれる「猟奇殺人」くらいのものであろう。

韓国で「猟奇」という言葉が使われ始めたのは、99年8月からパソコン通信で連載が始まった、『猟奇的な彼女』の小説がきっかけだ。その原作者はキム・ホシク。「キョヌ74」というハンドルネームで発表した連載小説により、彼は一躍インターネット界のスターとなった。これは、もともと3編で終わる予定の、大学生キム・ホシク自身の恋愛話を紹介した小説だったが、そのあまりの面白さのため、ファンからのメールが殺到し、連載が続けられた。そして遂に2001年1月には本として出版され、10万部以上のベストセラーになった。

「猟奇的」と表現された彼女、すなわちチョン・ジヒョンは、この映画のように① 酒に酔って電車の中でお客の頭にゲロを吐いたり、② 援助交際しようとするオッサンと女の子を怒鳴りつけたり、そして、③ 大好きな彼氏にいつもピンタをくравせたり、する、何とも破天荒でハチャメチャな、しかしホントは傷ついた心をもったやさしい女の子であり、実はホシクの彼女そのものなのだ。

私にとっての「猟奇的彼女」は？

突然素っ頓狂な言葉をしゃべったり、突拍子もない行動をとる女性は多くはないが、たしかに存在する。そして、なぜかその人たちには魅力的な女性が多い。

「彼女」という言葉を、この映画の「前半戦」のように「お友達」と置き換えたら、今年1月に55歳になった私にとっても、「猟奇的な彼女」は何人か存在する。そこで「スペシャルサービス」として、それを少し紹介しようと思ったが、やっぱりマズい……？

しかし、冒頭に書いたように、「猟奇」ブームとなったのは、キム・ホシクが自らの恋愛体験をインターネットへ紹介したことがきっかけだから、私だって、

中年オジサンの猟奇的彼女の紹介や恋愛体験をうまくまとめてインターネットに発表すれば、意外に評判を呼ぶかも……？ 名付けて、「中年オジサンによる、日本版『猟奇的な彼女』」。自慢じゃないが、書くネタはいくらでも持っている……(?)。

もしこれが評判を呼べば、私は弁護士以外に「二足のわらじ」を履いている映画評論家としての仕事の他、「作家」としての仕事が増えることになるかも……？

ナニ、「単なる、スケベおやじの趣味だけではムリに決まっている……？」 そりゃそうでしょう！ 私だって、それくらいのことはわかっていますヨ……。

総論——男としては……

女の子は、この恋愛映画を観て拍手喝采だろう。これだけ「女のワガママ」をかなえてくれて、文句を言わず、しかもずっと自分を見守り、愛してくれる男がいれば、そりゃ女の子はうれいいに決まっている。韓国は、まだ封建色が強く、男尊女卑の風潮が強く残っているものの、若者の間では、この映画のような「女性上位」の恋愛が既に大いに浸透しているのかも……。

日本では既に10年ほど前から、圧倒的に恋愛の力関係、かけひきにおいては、「女性優位」の時代。男は、「アッシー君」「みつぐ君」と言われて久しい。たしかにそのような、「やさしい男性と強い女性」とが結びつく恋愛の形も、悪くはない。しかし私のような亭主関白の中年男性には、これを見てると一面菌がゆいところもある。思わずキョヌに対して、「もっとしっかりせんかい！」「そこでどつき返してやらんかい！」と叫びたくなってしまふのだ。しかし、それを言っちゃおしまい……。それを言わないキョヌだからこそ、「猟奇的な彼女」も、ずっとキョヌのことを思い続けていてくれたのだから……。やっぱり中年の俺が、若いキョヌに学ばなければダメなのかナ……？

2004(平成16)年1月30日記